

九月二十四日、雨もよひの中を澁谷區文化センター六階なる傳承ホールに赴く。教へ子なりし生田美子が、「あたらしい日本の歌」演奏會にて何曲かの伴奏するがゆゑなり。プログラムに目を通ほせしに、七曲の伴奏すとあり。つまり詩人と作曲家よりなるこの「詩と音樂の會」の會員による藝術歌曲二十曲の内の七曲なり。始めに會長の平井丈一朗より挨拶あり、そが中にて山田耕筰を嚆矢とすといふ「藝術歌曲」の説明あり。

この命名中にある「ゲイジユツ」なる語、筆者などには使ふにためらひを感じるところあれど、大辭典によるに、すでに續日本紀に「すこぶる藝術に涉り」と出現、されど意味は今の時の「技藝」にあたるもののごとし。明治の漱石作品にもよく顔をだす語なれば、獨逸にてクンスト・リートといひならはせたるを、留學せる耕筰、直譯したるものならむこと、うべなはる。クラシック音樂同様、一般的なる藝術の定義に従ふこととし、説明に耳を傾くることとせり。

明治日本の藝術歌曲の最大の特徴は、ことばを大切にするところにあり、なかんづく意味を知る要ありと云ふ。ここに思ひ出さるるは、テノール歌手ルネ・コロの言葉なり。バイロイトにてワグナーに開眼せるルネ・コロ、歌はことばの意味が大切なるものにて、そのため客が聞き分けらるゝやう明瞭に歌ふが必要と主張、ゆゑにアイーダなど歌ふ氣がせぬといふ。山田耕筰も同趣旨の發言多く、アクセントやイントネーションにもかなり神經使ひたること有名ならむ。「蟹味噌」なる歌曲にて初め歌詞をとりちがへ「さけのさなかに」に曲つけたるところ、後に「さけのさかなに」なること、日本語に特徴的なる高低アクセントの違いに氣づきて、「さ」より「なかに」の音程を下げ、「かなに」を上げるやう書直したりとは、正しい日本語にて歌ふべしと絶えず主張をつづくる藍川由美さんが指摘せるところなり。されどそこは藝術歌曲、辭書の通りばかりとは行かざるを如何せむと平井會長。そこよりハイネの詩に曲をつけたる「ローレライ」なる歌曲、日本語にて近藤朔風の填詩によるものを誹謗せる話聞きたることあり、「なじかは知らねど」は「知らねど」が急に高音となるは、本來は下るべき語調（イントネーション）なればをかしと。詩としての全體は中々の名譯なるは疑はざれど、日本語の生理に背ける點は非難されてしかるべきなり。

日本の藝術歌曲の他の方針は、クラシック音樂なるべきこと、ピアノの伴奏によることとなり。生田美子、毎回のごとくに伴奏に呼ばるゝは光榮なること實感さるると共に、かかる活動が日本語を通じて日本文化への貢獻を果しをることを是とするものなり。